

新型コロナウイルスの感染がな
おさまらない。ついでにジャーナリストの批判も
感染の拡散と同時に起き、「これも
叫まない」になります歎しいも
のになっている。代案を示すこと
もない一方的な批判で何かをする
う安倍晋三氏の意見は無いのでは
ないか。
在である。
その制約下で既存の法律を駆動する
員、なお残る首相権限を握り胸
り行使して事態に対処しようとい
う安倍晋三氏の意見は無いのでは
ないか。

対処している以上、その方針したがつゝとは民主主義の正当な手続を経て選ばれた国民として当然のことない私は考へる。首相の対外方針への批判、ましてや内閣は事態の収束後徹底的な検証を経てからのことにはどういふか。

緊急事態への対処 明治の教訓



拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫

汚染が特に著しいという報が入る。明治28年6月から8月末までに23万人人が火船以上の船舶で運搬した。戦争に國力を消耗していき日本の緊急事態である。

非難と憤慨を乗り越え、陸軍次官・兒玉源太郎が事態対処の指揮官であった。事務予算確保に目次はいたが、行政的手段において優れ、かつ専門的知識をもつ者はおらぬかと目を凝らす。ロベルト・コッホ研究所に留学経験のある内務省衛生司局長の後藤新

平に着目、抜擢相馬事件といわれる奇縁なお家騒動に巻き込まれて連坐の元の後、敗訴したものの、衛生局長を辞し浪費された身をかうって以後腰の復活がこれになつた。

大事業の開始である。検疫の場所には、広島宇品の候島、大阪の梅小路、横浜、下関の彦島の3つの離島を設立。蒸気式消毒艦と呼ばれるボイコットを導入しての対処を決意。コロナ研究所で起居をともにし、細菌学者としてすでに名をなす北里柴三郎

に見、目り定内こ2機主

（わたくし）
いに頗るするにちが
いは、後世の人々がこ
い。新しい地平を拓く
氣運をもつてゐる
官にはその並大抵で
やがては報われ、新
ルの機運へとつなが
くに名を遺す「日本
世に名を遺す「日本
ろう。民主制度・機
といった命運のいは
在とでは隣りたのが
較は難しい。

モードル」となれば、もろもろの問題、人権尊重等を対応しては、いた者の名前を記す必要がある。されば、この「モードル」ではない。しかし日本モードルではない苦労が大きいのだというのだ。この問題をどうするか、対応してほしい。いい。